

「個・孤の時代」の情報管理 ①

昭和の時代、それぞれの家庭では一台の電話機を家族全員で共有していました。メールも SNS もない時代、郵便ポストも家庭に一つ。家族のメンバーの情報は家族全員で当たり前で共有し、それが地域や学校にも筒抜けの状況となっていました。



平成の時代になり、「個人情報」という概念が広がってくると、地域や学校で名簿や連絡網などの配布がなくなり、核家族化した家庭の中だけで情報が閉ざされるようになりました。ただそれでも、「家族の中で起こったことは、すべて家族だけで解決する」という前提が機能しているうちは、何かあったときは家族に聞くか家族に任せることで、事は収まっていた。

しかし令和の時代、単身世帯が急増して「個人の時代」「孤独・孤立に陥りやすい時代」になった今、個人の情報そのものも単独化し、電話の機能も郵便の機能も含めて個人のスマホの中に関じ込められてしまうようになりました。離れて暮らす家族がいても、その人の情報は分からないという状況が当たり前になっています。

ひとり暮らしをしている人が元気なうちはそれでも良いのですが、急に支援が必要な状況になったときに、本人がしっかりと意思疎通をしたり意思決定をしたりすることが出来ない状態であれば、周囲の誰もその本人について何も分からないところからのスタートになってしまうのです。

先日、厚労省の国立社会保障・人口問題研究所が発表した日本の世帯数についての将来推計によると、一世帯当たりの平均世帯人員は、2020 年の 2.21 人から減少し続け、2033 年に初めて 2 人を割り込んで 1.99 人になるそうです。すでに 2020 年の時点で最も多い家族類型は「単身世帯」でしたが、一般世帯総数に占める「単身世帯」の割合は、2020 年の 38.0%から 2050 年には 44.3%へと上昇し、世帯の単独化がさらに顕著になる将来像が示されました。

そうした中で、これまでのように個人の情報がそれぞれの心の中やスマホの中だけに閉じ込められているままであるとしたら、支援が必要になったときにスムーズな支援に繋がることが困難な事例が急増することは明白です。

かといって、「個人情報」への意識を逆戻りさせることは現実的ではありません。そこで、これからの「個・孤の時代」に必要なことは、それぞれ個人が大切な情報を自分自身でデータとして管理をし、必要な時期に必要な人に、必要な情報だけを共有することができるような「備え」をしておくことではないでしょうか。

いつ何が起こるのか分からないのが人生です。決して一人暮らしの高齢者だけに必要なことではありません。どの世代にも必要な「備え」となることでしょう。

こうした「個・孤の時代」の情報管理と情報共有の必要性について、これから数回にわたって事例とともにお伝えしていきたいと思えます。